

「地域の論点」

残し伝えるということ

表具師 芳仙洞

北岡 隆洞

私は中野市で表具店を営んでいる。「表具師/ひょうぐし」とはどんな職業か…。皆さんが即答に至るには少し縁遠い職種かと思われる。

「表具師」は織物や和紙、糊を吟味駆使し、傷んだ掛軸や屏風、額などを修復したり、障子や襖の貼り替えを承っている専門職である。掛軸や屏風などに全く触れた事がない方も「日本画を治すお医者さんみたいなもの」とでも言えば伝わるだろうか。

日本の伝統的な建築とは切っても切れない関係。大工、左官、畳師、庭師などをはじめ様々な職種があるが、表具師もそのひとつである。

古いものを直す。という仕事を通し、感じることを述べさせていただきたいと思う。

掛軸などの美術品は、いつか必ず次の修復を迎える時が来る。私達はその事を踏まえながら作品と対峙する。

掛軸は、絵とその周囲を飾る織物を組み合わせて出来ている。作品の裏面には裏打ちと言って、和紙を糊で接着させて補強してある。乾かしてはまた貼る。を繰り返し、数種類の和紙が貼り重なっている。糊加減や和紙・織物の選択が、仕上がりを大きく左右する。

修復の際は、裏面に貼ってある和紙を濡らして全て取り除く。使う材料の吟味も然ることながら、この時キモになるのが使われている糊だ。

弊社では、掛軸の裏打ちに使う糊を自分で炊いて作っている。

糊には2種類あり、1つは炊いてからすぐに使えて、接着力もある糊（新糊/しんのり）と、その新糊を熟成させてから使う古糊（ふるのり）がある。

古糊の仕込みは毎年大寒。1年で1番寒く雑菌の発生しにくい時に行く。その年炊いた糊を甕に入れ、蓋をして封印する。

翌年大寒まで寝かせると中にはカビが生えている。そのカビを取り除き、寒の湧き水を入れてまた封印する。糊の接着力は次第に落ちていく。

熟成を重ねてくると糊の匂いも変わり、カビが生えにくくなっていく。掛軸にしか使えない糊ができる。完成に至るまで約5~10年掛かる。どこにも売っていない。表具師自ら作るほかない。工房ごとに作り方にも差異がある。とても手が掛かる上、完成した糊ごとに個体差があり、使いこなすには経験がいる。

だが、永く、永く昔から使われている糊だ。安心して修復に臨める。

この古糊の素晴らしい所は、とても接着力が弱く、コシも柔らかく仕上がる。コシが柔ら

かという事は、作品を巻いた時に負担を掛けにくい。という事に繋がる。古糊には接着力が無いので、ただペロっと付けただけでは巻き掛けに耐えられない。どうするかというと、糊を付けて作品裏に貼ったその和紙を、刷毛で叩いて打ち込む。上質な和紙はその繊維が長い。糊自体の接着力で貼り付けるというよりは、打ち込んでその繊維を解し、繊維同士を絡みつかせ接着させるという感覚だ。だから「裏打ち」と呼ぶ。これらの糊で仕立てた作品は修復の際、とても剥がしやすい。作業時には水分を与えて剥がすのだが、作品に与えるストレスは少なく済む。直すという点に於いて最高である。

住宅は床の間や座敷、土壁。そんな和空間から気密性も高くクロス張りの洋空間に変わっていった。古糊仕立ての掛軸は、冷暖房の効いた環境下では暴れてクセが出てしまうのが欠点だ。安く・早く・簡単に・量を。時代も人々の感覚や価値観も変化した。

真っ白いボンドのような化学糊や、裏打ちフィルムを熱で接着させて仕立てるため修復不可能な機械表具が登場した。ほとんどの表具師はその流れに合わせ、それらに切り替えた。県内で古糊を使って掛軸を仕立てているのは弊社だけではないだろうか。

化学糊などは出来てまだ日が浅い。今後どんな影響が出てくるかは未知数だ。

私達の仕事は後々まで残る。誰がどこで観るか分からない。私がいなくなっても、私がさせて頂いた仕事として存在する。例えそれがその時、どんな状態であっても。とても怖い。畏れるべきこと。

「この作品は〇〇〇万円！」だから良い物だ。「超有名画家が描いた作品」だから良い絵だ。「みんなが良いって言っている」から良いに違いない。自分もそうしよう。「こんなもの直す価値ない」「そんなに手間かけなくていいから最低限で」

安くて良いものはあるし、高ければ何でも良いという訳でもない。その基準はどこにあるのか…。その物や対象を自分はどう感じるのか。考えさせられることもある。ご持参頂く作品が、とても古い時代のものでも、小さなお子さんが描いた絵でも、何とか残したい。という持ち主の想いは一緒だ。

いざ修復を開始したら、受けた値段云々よりも無事に仕上げる事。に頭はいく。失敗は許されない。だから直す人々は手が抜けない。修復後「大事だからこのまま、しまっておきます。」とおっしゃるお客様がたまにいらっしゃる。「こうした作品は生き物なので、たまに出して虫干しして下さいね。」と申し上げる。しまったまま。は却って作品を傷めやすい。掛軸は巻いて掛けてを繰り返す、特殊な美術品だ。それが掛けた時に、ストンとクセなく真っ平らに掛かる。掛軸として理想のカタチだ。

巻いたままとは云わばずっと正座しているような状態だ。知らずのうちに湿度も籠るし、何年もずっと巻き放しでいざ！と掛けても、足が痺れるのと同じで長い事しまえばなしの巻癖はすぐには取れない。無理に引っ張れば余計なダメージを与えかねない。そんな状態であっても、その店でやってもらった仕事だ。となる。

掛軸の巻き掛けは最初おっくうだが、慣れれば愛着も増し、季節を彩る風物詩となる。直す事はもちろん大切だ。しかし、直せば未来永劫大丈夫。ではない。作品を受け継ぐ側も、ぜひ楽しんで扱って頂ければと思う。

昨年、未曾有の災害が長野一帯を襲った。甚大な被害が出た。一夜にして全てが変わった。弊社も僅かながら襖や障子復旧貼り替えをさせて頂いている。あの場に立てば、何とか力になりたい！という想いに駆られる。

水害にあった襖や障子はなかなか汚れが落ちない。黒塗の縁などは割れて剥がれてしまう。中まで汚れが染み込んでしまっているから、障子に付いた泥シミは落ちない。災害後、何とか直してもらえないか？とたくさんの方からご依頼を受けた。その変わり果てた建具を前にお客様も私達も、お互いに涙を流した。

ご依頼頂いたあるお寺様も、絵が描かれた襖やシミが残ってしまった障子を直せるだけ直して再利用し、過去にはこんな事があった。という事実を後世にちゃんと残したい。と仰られている。何とか、何とかしたい。何とかしてほしい。そういう時の思いほど心を揺さぶられるものは無い。後世の人々にも、その思いを感じ取って欲しいと願う…。

あまりの事で、建具を捨ててしまった方も多し。建具を新調すると相当掛かる。建具ってそんなに値が張るなんて思わなかった…。残しておけば良かった…。皆さんどんどん捨ててたから…。という声をお聞きする。現場は想像を絶する。迷ってなどいられなかった。

振り返れば、物を残す。という在り方に直面した一大事かも知れない。SNSなどでも引き続きお知らせしていくが、まだまだ復旧貼り替えは受け付けている。

私も出来る限りのお手伝いを続けさせていただきたい。皆様の願いを何とかを形にしたい。私の腕で良ければ、ドンドンこき使って頂きたい。早く皆さんの安心した笑顔が見たい。

今は何でも掌の中で簡単手軽に調べられる。弊社でも積極的に活用している。実際、ご注文を頂くお客様の範囲も広くなり、弊社ホームページをご覧になったりして、依頼する際のひとつの参考にされているようだ。ネットでの注文も増えてきている。Webの中では世界中を飛び回れる。何でも知れる。参考になる。でもそれを自分の知識として、さも博学のように語り、自分にも出来る。と勘違いしてしまうケースもたまにある。インターネット社会が無くなる事は恐らくない。もっと進む。簡単便利になるのは良い。でも、そこは履き違えないように注意したい。その中に全てがあるわけではない。

子供達のなりたい職業 No. 1 が YouTuber。というこのご時世はどうかしていると思う。情報過多と上手く付き合わねばならない。汗水流して働いたって、上手い出来ないことだって沢山ある。

表具師という仕事は、言い換えれば、過去から受け継がれてきた物を現時点で直し、次の世代に送るという役割ともとれる。そういう意味に於いてはひとつの「点」を作る仕事だ。

点と点は結ばれ、果てはその作品にとって歴史という線になる。

私の住む中野市は、江戸時代天領だった事もあり、人々の交流が多く文化芸術が盛んだった。また、明治初め中野県となり県庁が置かれたりした。町内に表具店が数多かったのは、そんな名残があるのかも知れない。江戸から現在に至るまで、数多くの文化人を輩出し、大物も訪れたりしている。

中野市は今、バラ祭りやおごっそフェアという地元の料理フェスに力を入れている。素晴らしい事だ。その労力たるや大変なことだ。まちづくりは本当に難しい。すぐに結果は出ない。中野だけではなく、周辺地域が賑やかになるのは素晴らしい。人を集めるには呼ぶ為の素材と、食は欠かせない。新しいものだけではすぐに飽きてしまうような気がしている。

仕事柄、地域の歴史に触れる機会も多い。たかが100年前のことでも今では分からないことが沢山ある。こんな人がこの町にはいたのか！こんな出来事があったのか！素晴らしい所ではないか！思わぬ所で繋がっていたりすると嬉しくなる。良い所ばかりではない。まずかった所もある。先人達が残してくれたものや、歴史に対する価値観を再認識していきたい。文化芸術で飯は食えない。とよく言われる。だがその部分にはその街の歴史や、奥深さ、魅力という地域性が色濃く滲む。本当のまちづくりという点においては絶対欠かせない鍵だと思う。人の情熱や願い、想い。それが集まり、地域らしさになり、脈々と繋がってきたここまでの「点」。まだ消えずかろうじて残っている。絶やしてしまうには惜しい。勿体ないと思う。

地域の歴史に敬意を払いよく知り、あるものをきちんと直して残し、新しきを取り入れながら上手く活かしていく。子供が、自分たちの住む町の昔あった話などを知っていたら…とても誇らしい気がするのは私だけだろうか。

「価値」とはどういう事だろう。高い・安い。便利・不便。早い、遅い。それだけでは測れないものもある。ここぞという時、しっかりと物差しを持ちたい。

師の教えを守り一生懸命学び、悩み壁にぶち当たったら色々応用してもがいて殻を破る。少しずつ自分のかたちが出来ていく。守破離。いつも頭の片隅にある。

「古糊」は過去・現在・未来を繋ぐこの仕事にとって、ひとつの象徴にも思える。先人が未来を見据えて創り出したカタチ。この糊作りを変えるつもりは無い。納めた際の「おお、良くなった。」その笑顔と一言で、それまでの苦労は吹き飛んでしまう。

日々研鑽を重ねていきたい。お客様の嬉しそうな笑顔が見たい。頼んで良かった。また来たい。そう思って頂ける店でいられるようそのために今、何をすべきか。

※本稿についてのデータ及び肩書等は執筆時の2020年2月28日現在のものです。

※表現及び言い回し等は執筆者の原稿を活かした形で掲載しています。